

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜③～メセナの時代に

村本 邦子

前夜、世はバブルの只中にあった。息子が生まれた 1988 年、京都国際会館で日仏文化サミットが開かれ、「企業の文化的責任」が熱く論じられ、以後、メセナの語が広まった。メセナとはローマ時代に遡る文化擁護を指すが、今では広く企業の社会貢献の意味を含む。当時はバブリーで品のないメセナも目立ったが、企業が文化に貢献しようとするようになるには、ある種の文化的成熟が必要だろう。逆の言い方をするなら、少なくとも市民が文化的貢献をしようとする企業を支持する社会になるということだ。世の中に疎い私が当時そんなことを深く認識していたわけではないが、自覚されぬまま、嫌が応にも人は時代の影響を受けるものだ。

当時、本を通じて、たまたま、マザーリング研究所を主宰するたけながかずこさんと出会った。今野由梨さん(はや 1969 年に株式会社ダイヤル・サービスを設立、日本初の電話相談「赤ちゃん 110 番」を開設したという著名

な女性企業家である)の影響を受け、たけながさんは、「育児支援は母親支援」、「仕事・家庭・ボランティアからなる“マザーリング3つの輪”の生き方」を提案され、複数の企業と提携して、子育て中の女性を社会につなげる活動をされていた。オフィスは東京にあったが、月 1 回、尼崎にある「つかしん」のベビーコーナーでマタニティサロンをやっているというので、暇を持て余していた私は大きなお腹を抱えて通い始めた。そこで知り合った人たちとは、ちょうど同じ時期に出産することになり、その後も子育て仲間としていろいろなことを語り合うことになった。息子出産後は車の免許も取ったので、運転の練習を兼ねて、娘が生まれる直前まで「つかしん」に足を運んでいた。

同じ時期、ネピアをスポンサーに、たけながさんが「ネピア赤ちゃん学」というのをやっていたので、私も 3 期生として応募した(何しろ暇だった)。これは、1985 年に始まり、1 期生から順番に、「マイお産ストーリー」「赤ちゃん 100 日戦記」「あんしん母乳育児」…と続い

て、93年第7期「ゆとりある育児」まで、毎年、テーマに添った作文を応募して選ばれたママたちが、1年間、東京と大阪で「赤ちゃん学」研究生になるというものである。たとえば、3期生の私だったら、母乳体験記を書いて(私の悩みは母乳の出すぎだった。妊娠中、12キロも体重が増えたせいなのか、母乳が出すぎて困ったものだ。十分双子が育つだろう。昔は母乳が足りない赤ちゃんにあげる「もらい乳」というしくみがあったそうだ。たぶん、子どもが私有化されている現代人には抵抗があるだろうが、私には良いしくみだと思える)、正確には覚えていないが、年に何回か堂島のロイヤルホテルに集まり(当時、私はそのあたりに住んでいた)、豪華にお食事をして(お茶だったかも…)、託児付きで、テーマごとのグループに分かれ、研究発表をして、きれいなクレヨンとネピアの紙おむつをおみやげにもらって帰るというようなものだった。

百貨店のマタニティ・サービスやマタニティ便利グッズなど、街へ調査に出かけ、ママ目線で商品開発やサービス向上を提言するのである。1年後には研究成果を冊子にした。振り返れば、これはグッド・アイデアの企画だったと思う。なにしろ、子育て中の母親はバブル時代マーケットのターゲットだった。当事者たちをうまくマーケティングのリサーチャーとして使いながら、一方で、知的好奇心や能力がありながら妊娠・出産で家庭に入ってしまったはいいが、「こんなはずじゃなかった」と閉塞状況に苦しんでいた母親たちを拾い上げ、社会参加する機会を提供したのだから。実際のところ、ここで拾い上げられた女性たちは、貴重な人材バンクであり、私を含め、うちの研究所のスタッフ3人はここの出身なのだ。

研究期間は1年だったが、卒業生たちはそ

れぞれ自主的に活動が続けた場合が多かったし、ここから複数、子育てに関わる社会的起業が誕生した。私たち3期生も、その後、ずいぶん長く活動を続けた。母親たちの集まりであると同時に、女性たちの集まりでもある育児サークルとして(これは案外、珍しかった)、イベントを企画しては集まり、どのくらいの頻度だったか忘れてしまったが、その後、何年も同人誌を発行し続けた。私が編集長をしていたような気もするが(今となっては遠い昔のことで、記憶が定かでない)、私自身は、妹にかわいいイラストを描いてもらって、「子どもウォッチングクラブ」という連載をしていた(こうして考えてみると、私はきっとウォッチングが好きなのだろう。最近では、ひそかに「おじさんウォッチング」をやっている)。

そういうわけで、私の子育て仲間には、ここで出会った人たちが多かったし、自宅で始めた子育てグループにも、この仲間たちが遠くから子連れでやってきてくれたりもした。この仲間たちと語り合ったこと、お産の話、女性の置かれた社会的状態(多くの女性たちが子どもを産むまで騙されてきたような感覚を持っていた)、女性の生き方、パートナーとの関係性、実家やパートナーの家族との関わり、そして、子育ての苦勞と喜びの共有は、後に研究所を作るうえでの土台となった。前回書いたような経過で、第二子出産のおり、勤めていたクリニックをやめることになり、こうして積んできた土台の上に研究所設立の思いつきに乗ったのだと思う。

ここにもうひとつだけ付け加えておくと、私が仕事を続けていく覚悟を決めたのは、娘を産んだからだ。それまで、私は仕事にこだわっていたわけではなかった。前回も書いたように、

経済的自立や社会的地位とかいうものにもとくに執着はなかった。とにかく、最低限、食べていけて、自分にとって面白いこと、意義を見いだせることができさえすれば、それで満足だった。これは基本的に今も変わらない。今では大学生となった子どもたちにも、「あくせく就活なんか振り回されるより、若いうちにおもしろい体験をいっぱい積みなさい。とにかく食べていけたらいいんだから」と言い渡してある。子どもたちは、「そんなこと言ってる人、お母さんぐらいやで」と、なかばあきれながらも、(きっと自分なりに悩みながらも)それぞれに人生をエンジョイしている。私としては、子どもたちに有名企業に就職して欲しいとも思わないし、安定した職業を得て欲しいとも思わない。野垂れ死には困るが、ワーキングプアでもいいから、自分の力で満足できる人生を創り上げて欲しいのだ。

娘が生まれた時、とてもおもしろい体験をした。母親は、同性である娘について自分の人生を託してしまうのだということを、身をもって学んだのである。息子が生まれた時、私は、息子の人生を勝手に夢見ることはなかった。「とにかく、なんでもいいから、自分の責任で、納得できる人生を生きておくれ」と祈っていただけだ。ところが、娘が生まれた途端、私は、娘に「女性として仕事を持って、社会で活躍しておくれ」と願った自分にびっくり仰天することになった。自分自身は、女性として仕事を持ってやっていきたいという願望の自覚はなかった。どちらかと言えば、夫の方が専業主婦との結婚生活を望んでいなかったのだから、細々と仕事を続けていた感じである(もちろん、やるからには、一生懸命やっていたつもりだけ)。もしも専業主婦が好きな人と結婚したら、たぶん、地域活動やPTA活動なんかを一生懸命

やっていたのではないかしらと思うことがある。

それなのに、娘に社会的活躍を願うなんて、これはまずい。それが本当に私の望みなのだったら、それは、娘に託すべきではなく、自分が生きねばならないのだ。この時、私は、きっぱりと働いていく覚悟を決めたのだ。娘が専業主婦になって、地域活動やPTA活動に打ち込む人生を生きたとしても、それは娘の自由だ。もつとも、そうはなりそうもないけど。私の姿を見て育った娘は、ある時(それは、きっと社会が見えるようになった時なのだろう)、「ねえ、世の中には、お仕事するお母さんと、お仕事しないお母さんがいるんだね」と言い、それから、もう少し大きくなってから、「ねえ、専業主婦って金魚鉢のなかの金魚みたいだね」と言った。私は、あわてて娘の口をふさいだが、これは、私が主婦としていかに何もしていなかったかを表しているだけのエピソードである(念のため)。以後、娘は、素敵なカフェやブティックに行くたびに、「うち、高校生になったら、ここでバイトしよう」と言い、「いったいいくつバイトするつもりなの!?!」と心配になるほど働くことに夢を抱き、実際に高校生になったら、USJで立派に働くようになった。母親の姿を見て、働くことが良いことだと感じ取ってくれたことは喜ばしいことではある。

ずいぶん脱線してしまった。とにかく、私は、娘を産んで、「しっかり働くぞ!」と決意し、開業することにした。娘が生まれたのが1990年の7月7日で、研究所開設が10月1日だから、9月頃には、つまり、娘が2カ月の頃には、アイデアを得るために関係者に会いに行ったり、部屋探しをしたりなど、活発に動き始めていたはずである。赤ちゃん学で仕入れた情報から「スナグリ」という抱っこバンドを愛

用していて(これは首が据わる前から使えて、成長とともにダーツを開いていって、かなり大きくなるまで使えるというすぐれものだった)、カンガルーのポケットのようなスナグリの中で娘はスヤスヤ眠り、2歳になったばかりの息子の手を引いて、私はあちこち元気に出かけていた(まだ20代で元気だったし…)

東京に行って、たけながかずこさんのオフィスを見せてもらったり、鉄道弘済会「お母さんのカウンセリング・ルーム」をやっていた三沢直子さんに会ったりもした。何を話したか私の記憶は曖昧だが、三沢さんは、のちに、「まだ、子育て支援という言葉さえない時代だったので、全国から相談が殺到して四苦八苦しており、幼い子どもを抱えての開設はとても無理なのではないかと言った覚えがあるけれど、さすがはエネルギッシュな邦子さん、あっぱれだ」と言ってくれていたのだから、きっと無理だと言われたのに、私があまりそのことを気にとめなかったということなのだろう。結局のところ、それからずいぶん長い間、子育て支援をしている臨床心理士は、関東の三沢さん、関西の私しかいなかったのだ。

この時、三沢さんから、関西だと「赤ちゃん本舗」に話をもちかけてはと助言を受けた記憶だけは残っている。そう、その頃、考えられる可能性は、スポンサー企業を見つけることだった。企業家に言われて、某有名企業の黒幕的存在という人に会いに行ったこともある。でも、私には、スポンサーを探すというのが何だか面倒だった。どこかがお金を出してくれるというならとくに拒否するつもりはないけれど、わざわざ自分で見つけたり頼んだりする労力と時間があれば、今、自分の持っているもの、自分にできることを資本に、さっさとやれることから始めるという方が私らしいのである。実際

のところ、バブルの時期に企業に頼って事業を始め、バブルがはじけた途端に事務所を畳まねばならなかったケースは少なくなかったから、それはそれで懸命だったのではないかとも思っている。ただし、最近、芸術教育研究所・東京おもちゃ美術館の多田千尋さんが、「これからは市民創造の時代。社会貢献したい企業があって、アイデアにあふれた市民NPOもあるのに、今はまだお見合いの場がない」と言っているのを聞いて、本物の企業家ならば、スポンサーにマネージされるのではなく、逆にスポンサーたちをマネージするのだろうと思うようになった。

必ずしも景気の良くない時代にメセナを考える企業は立派である。そんな企業を支持する市民社会は成熟を反映するのだろう。これから私たちの社会はどんな方向を目指していくのか。

